

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 07 月 19 日	
所属部局・職	京都大学理学研究科動物学教室動物行動学研究室
氏名	福田 将矢

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
愛知県犬山市ジャパンモンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
動物園博物館実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 7 月 8 日 ~ 平成 29 年 7 月 10 日 (3 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
伊谷原一 (JMC 園長、WRC 教授)、大淵希郷 (JMC キュレーター、WRC 特定助教)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回の動物園・博物館学実習では、ジャパンモンキーセンター (以下 JMC) の活動を基にして、動物園の飼育活動および博物館のキュレーターの仕事の様子を理解した。主な活動としては園長による JMC のレクチャー、園内見学、標本実習、教育・科学コミュニケーション実習、飼育実習、エンリッチメント実習、博物館概論・獣医実習などである。それぞれについて学んだことを簡略に説明する。</p> <p>1 日目は、到着してまず JMC 園長の伊谷さんから JMC および日本の霊長類学の歴史についての簡単な説明を受けた。日本の霊長類学の始まりとなった今西錦司氏に関する説明など、1 時間ほどレクチャーを受けたあと昼食を食べ、園内見学を行った。大淵さんや各モンキーの飼育員さんから説明を受け、実際にお客さんの視点でモンキーセンターを見学させていただいた。モンキーセンターは、アフリカ、マダガスカル、アジア、南米、ギボンハウスなど様々な地域のサルを展示している。特に私が気に入ったのは、ワオキツネザルの展示スペース、WAO ランドである。ここでは、園内の隔離スペースで放牧されている、のびのびとしたワオキツネザルの姿を見ることが出来る。時間になると餌をあげることもでき、普通の動物園のように檻ごしでなくワオキツネザルの姿を見ることが出来るのが大きな特徴である (図 1)。その後は新宅さんによる標本実習があった。JMC では霊長類の骨格を数多く保管しているが、一つの大きな特徴は頭蓋骨だけでなく全身骨格を保管しているところである。今回の実習では、2 人 1 組の班に分かれて年齢や性別の異なるニホンザルの骨格を用いて骨格の様子を比較したり、実際に博物館で行う作業として、骨にナンバリングを行い、部位ごとに袋分けするという保管作業を行った。私たちの班ではアヌビスヒヒというヒヒの仲間の骨を扱ったが、腕の骨と脚の骨の見分けがつかなくなったり尻尾に存在する細かい骨が分類できなかつたりと、実際に自分の手で作業を行うことで新たな発見が生まれ、ぜひ私の分野でも活かしたいと感じた (図 2)。</p> <p>2 日目には大淵さんの科学コミュニケーション実習から始まった。研究者が自分の研究を一般の方にもわかりやすく伝える、という機会が多いのが動物園である。その中で研究者と一般の方とのイメージ (コンテキスト) のズレを認識することが何よりも大事であり、科学の発展につながる近道だとお話を頂いた。聞いているときには当たり前だと感じていたが、実際に後述する飼育実習で飼育員として来場者の方</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

と接したとき、自分が持っている知識を相手も知っているものとして話してしまいそうになり、ズレの認識という難しさを再確認した。話を聞くことと実際に経験することは全く違うと感じた出来事であった。飼育実習では、KIDS ZOO という場所を担当させていただいた。JMCには霊長類の展示のほかに、哺乳類から爬虫両棲類、昆虫を展示する子供に大人気の KIDS ZOO というスペースがある。今回の実習ではそこで新たな展示を作るという作業を行った。スタッフとの会話が増えるような、好奇心がそられるような、来場者の目線に立った展示を作ることを目標に、トノサマガエル、ツチガエル、アマガエルの展示を任せられたのだが、実際にこれらの目標を満たした展示を作るのは考えていた以上に苦労するものであった(図3)。

3日目は環境エンリッチメントについて考える実習であった。環境エンリッチメントとは、飼育動物の幸福な暮らしを実現するための具体的な方法であり、例として設備や採餌行動などを野生の暮らしに近づけることや、いろんな行動を選べることなどがあげられる。午後には実際に KIDS ZOO において飼育しているシバヤギの採餌をもとにして環境エンリッチメントを考えた。現在の飼育スペースで、限られた予算で、また来場者にとっても動物にとっても幸福な設備を考えるというのは初めてのことだった。ここで大事なこととしては、対象動物の行動をよく見ることである。例えばヤギであれば餌箱を地面に置くというスタイルだと、その中に糞尿をしまい衛生上問題となってしまう。しかしながら柵上に設置してしまうと、来場者が手を噛まれやすい環境ができてしまう。このように様々な利点と不利点、またその解決策を考えるのは大変ではあったがとても楽しいものであった。今回は飼育環境やヤギの採餌の様子から鑑みて4つの案を提出した。(図4)。

今回の実習では、実際に動物園・博物館の飼育者、経営者、研究者の仕事を経験させていただくとても貴重な機会となった。私も動物を扱って研究させて頂いている身として、今回学んだ様々なことを将来に活かせるようにしたい。



図1. WAO ランドのワオキツネザル



図2. アヌビスヒヒの全身骨格



図3. アマガエルの展示

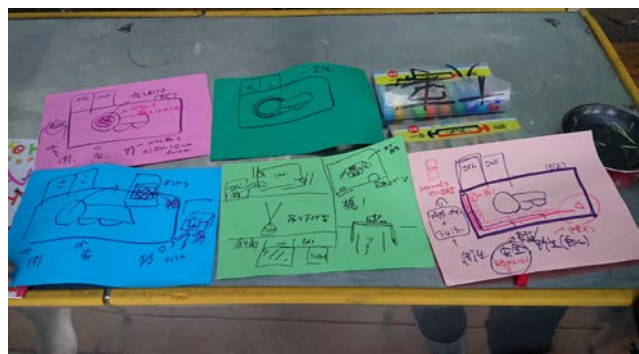


図4. シバヤギの環境エンリッチメント提出案

6. その他 (特記事項など)

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

--